



堀口健治・堀部篤 編著

『就農への道
—多様な選択と
定着への支援—』

地域農業の担い手確保が大きな課題となるなかで、各地で新規就農に向けた取組みが進んでいる。新規就農者数も全体としては年間6万人前後で推移しているが、新規雇用就農者や新規参入者は増加しており、非農家出身者にも就農の道が開けてきていると言える。

本書は、新規就農への研究実績を持つ研究者や農業経営継承事業のアドバイザー、教育現場で雇用就農に関わる実務家が集まって執筆された。その狙いは、新規就農を多面的に捉えることで、実践面、政策面、学術面で貢献しようとするものであり、意欲的な書であると言える。

多面的というのは第一に、新規就農の実態を統計によるマクロ的な把握と事例の組合せによって、捉えようとしている点である。第二に、新規就農を親元就農、新規独立就農、雇用就農の3つの就農形態に分類し、それぞれについて特徴と課題を浮き彫りにしようとしている点である。これまでの新規就農に関する書籍は、その多くが独立就農に焦点を当てており、親元就農、雇用就農についてはあまり対象にならなかった。新規就農を本書のように総合的に扱ったものは見当たらず、本書の重要な意義はこの点にあるだろう。

以下に本書の構成を、次いで評者の所見を述べたい。

まず第1章では、新規就農をめぐる最近の状況について、統計やアンケート調査の結果をもとにまとめている。この中で、新規就農のあり様が多様化していること、参入障壁の軽減が進む一方で、就農後の経営状況の改善が進んでいないことが明らかとなる。特に新規就農のあり様では、雇用就農を独立へのステップとしてではなく、自身の夢の実現のために選択した事例や、親元就農でも自身の経営と実家の経営との関係が様々であることが取り上げられている。

続く第2章は親元就農に焦点を当てている。日本農業経営大学校の卒業生の事例を中心に、定年帰農や大規模法人による経営継承事例まで紹介されている。農業経営大学校の卒業生のなかでは、親元就農と叫びつつも親世代の農業経営を引き継ぐだけでなく、時代に合わせて新たな経営部門を設立する事例や、新商品を開発する事例が目を見つめる。また、大規模法人による経営継承では、継承を一定の時間の幅を持った継承過程として捉える必要性を指摘している。

第3章では、新規独立就農を対象として、研修から就農・定着への経緯と、地域との関わりが紹介されている。また、新規独立就農の場合、行政や地域からの支援が不可欠であり、支援制度についても触れている。さらに近年進みつつある第三者継承も取り上げており、多様な就農ルートの存在と定着に向けた長期的な支援の重要性を指摘している。

第4章では、新規就農形態のなかで特に増加しつつある、雇用就農が取り上げられている。まず、雇用就農をめぐる情勢と制度（農の雇用事業）の運用について整理がなされ、先進的な農業法人における、人材の

定着・育成にかかる取組みについて、モチベーションや経営管理など様々な観点から整理されている。

以上が本書の構成となっている。各章の事例はどれも興味深いものばかりであり、それだけでも十分に実践的なヒントを提供している。以下では、本書を通しての評者の若干のコメントを述べさせていただきたい。

1点目に、本書の重要な成果として新規就農の多様さを指摘したことが挙げられよう。本書が3つの就農形態を取り上げるといふ特長を有していることは、先に述べたとおりであるが、それぞれの形態のなかにも多様な就農スタイルがあることを明らかにしている。親元就農における就農者（後継者）の新たな取組みや、新規独立就農者の持つ様々な背景と農業への思い、雇用就農を通じた夢の実現など、新規就農に向けては、本書のタイトルのとおり「多様な選択」があることを示している。この点は、これから新規就農を目指す読者にとって、その選択肢を広げる重要な示唆となる。

2点目は本書で取り上げられた全国の就農事例の分析についてである。目次に表れているだけでも10以上の就農事例が取り上げられ、就農に至る経緯や支援方策、周囲との関係構築など、そのプロセスが丁寧に示されている。定着までにどのような課題が発生し、どのように対処してきたのかについてまとめられていることは、実際に新規就農に関わる主体（就農希望者や支援機関）に対して、実践面での有益な知見を提供している。

一方で、多様な事例を扱うという本書の特長が、コインの裏表のように課題点として浮かび上がってくることを指摘したい。

本書が取り上げる事例は品目や関係主体、就農者の意向などが異なるため、事例から導かれる知見の一般化が困難だということは想像できる。本書の中で就農形態や支援策の効果について、部分的に一般化を試みている箇所もあるが、そのほかでは“優良事例集”のような箇所も見受けられた。事例分析で得られた知見がより一般化されれば、本書の政策面・学術面での貢献もさらに高まったのではないだろうか。これがコメントの3点目である。

4点目は、就農支援への提言についてである。「あとがき」にあるように、本書は多くの事例を取り上げることで、新規就農希望者には「多様な選択肢」を、新規就農を支援する担当者には「適切な時期に必要な助言をする体制を築く」ヒントを提供している。しかし、この豊富な事例を受けて、今後の就農支援のあり方はどうなっていくべきと考えられるか。就農への選択肢が多様化するなかで、例えば地域内での複線的な就農スタイルの構築、就農希望者と受入先のマッチング問題など、本書の内容をもってすれば、そこにも踏み込めたのではないかと期待してしまうのは無い物ねだりだろうか。

以上が評者の所見である。新規就農は一つにはキャリアの問題、一つには経営の問題、一つには地域の問題であり、本書はそのすべての問題を扱っている。新規就農に関わる人であれば、誰が読んだとしても、それぞれの視点から新たな知見を得られるであろう。

——農山漁村文化協会 2019年5月

定価2,400円（税別）196頁——

（研究員 長谷 祐・ながたに たすく）